

同志社大学

2010年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2011年 4月 14日提出

所 属	職 名	氏 名
グローバル・スタディーズ研究科	准教授	菊池 恵介
研 究 題 目	グローバル化とレイシズム	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究は、フランスにおける人種主義の問題を、1) 植民地支配の歴史、2) グローバル化と福祉国家の危機、3) 移民排斥と新しいレイシズムの三つの視点から考察している。初年度の2010年度は、文献の収集などに力を注ぎ、論文の公刊という形では、まだ成果が現れていない。以下では、幾つかの翻訳を成果としてあげておく。</p> <p>まず、フランスの植民地主義の歴史に関しては、武蔵大学の平野千果子氏とともに、『植民地共和国』を翻訳した (Pascal Blanchard, Nicolas Bancel, Françoise Vergès, <i>La République coloniale, Essai sur une utopie</i>, Albin Michel, 2003. 岩波書店より、まもなく刊行)。これは、フランスの共和主義者たちが、自由・平等・友愛などの普遍的価値に基づく共和国を樹立する一方で、どのように「文明化の使命」のレトリックを駆使し、植民地拡張政策を押し進めていったかを論じた書である。</p> <p>次に、現代ヨーロッパにおける移民排斥や新しいレイシズムという観点では、二本のドキュメンタリー作品の日本語字幕を制作した。一本目は、Vivek Bald 監督の <i>Mutiny -- Asians Storm British Music</i> (2008)。もう一本は、Jérôme Host 監督の <i>Un racisme à peine voilé</i> (2004) である。前者は、大英帝国の植民地だったインド・パキスタン・バングラデッシュ出身の移民二世をとりまく状況を、現在イギリスで活躍するアジア系ミュージシャンへのインタビューを通じて描き出した作品である。後者は、2004年にフランスで起きたイスラム・スカーフ論争をテーマとする作品である。スカーフ論争の本質を、政教分離や男女平等などの原則論の問題として捉えるのではなく、普遍主義的価値の名を借りた差別事件として捉えるところに、本作品の特徴がある。いずれも本年度に同志社大学で上映し、シンポジウムもしくは講演会を開催する予定である。</p>	